

沈黙するヘティと語るグウェンドレン

ジョージ・エリオットの小説の自由間接話法とトラウマ克服

石井昌子

<はじめに>

本発表は、George Eliot (1819-80)の最初の長編小説 *Adam Bede* (1859) の主人公の 1 人 Hetty と、最後の長編小説 *Daniel Deronda* (1876) の主人公の 1 人 Gwendolen に焦点を当てる。エリオットはヴィクトリア朝作家らしく道徳を重んじたが、その道徳の基礎を信仰ではなく人間同士の共感に置いた。本発表は、エリオットの道徳観に基づくヘティやグウェンドレンに対する共感もしくは反感が 2 人の心理を描く自由間接話法にどのように影響するのか、またこの 2 人は物語の終盤でともにトラウマを抱えるが、自由間接話法は 2 人のトラウマ解決にどのように関わっているのかを論じる。

自由間接話法 (Free Indirect Discourse) という用語は 20 世紀初頭の言語学において生まれ、語り手の全知が疑われ語り手が登場人物の心中の考えに埋没することが好まれるようになって脚光を浴びた。自由間接話法は、直接話法の文構造が潜在的に残され、多くは伝達動詞が省略されているという文法的特徴を持つ (Leech and Short 270-71)。登場人物と語り手の声の関係は「二声 (dual voice)」であると普通考えられ、作者が登場人物との間に距離を置き皮肉な態度を取っていると解される場合と、作者が登場人物に同情的と考えられる場合があり、作者は自由間接話法の使用を通して読者のシンパシーをコントロールできる (Gunn; Leach and Short 278)。

トラウマとは、*The Oxford English Dictionary Online* <trauma>2a.によれば、“*Psychoanalysis and Psychiatry*. A psychic injury, esp. one caused by emotional shock the memory of which is repressed and remains unhealed; an internal injury, esp. to the brain, which may result in a behavioural disorder of organic origin. Also, the state or condition so caused.”であり、初出は『ダニエル・デロンダ』出版の 18 年後の 1894 年である。そして現代の代表的トラウマ治療では、トラウマを語ることと他者との信頼関係を再構築することが重要視されている (ハーマン 205-379; ヴァン・デア・コーク 14-15)。

<ヘティの場合>

テナント農家の当主の姪のヘティは荘園領主の跡取り Arthur と関係して私生児を生んだ。ヘティは生まれたばかりの赤ん坊を森の中の穴に埋めて放置し死なせてしまう。耳について離れない赤ん坊の泣き声と赤ん坊を埋めた穴が空になっていた光景が、トラウマとなってヘティを苦しめる。先行研究は一般に、ヘティが自分の赤ん坊を置き去りにしたことだけを問題にして彼女が十分に罪を認識し悔悟していると考えているが、彼女のトラウマには言及しない。本発表では次のように考える。ヘティの罪は 2 月の寒さの中に放置しただけことでなく、生まれてから 1 度も赤ん坊に乳を与えず飢え死にさせたことにあり、この点はこれまで見逃されてきた。エリオットが母親の愛情を利他的な愛情の最たるものであると見なしていることは『アダム・ビード』のテキストに現れている。第 40 章で語り手は、アダムが自分を裏切ったヘティを許す心を “the mother’s yearning” と呼び、それを “that completest type of the life in another life which is the essence of real human love” (387; bk. 5, ch. 43) と説明している。作者はヘティがトラウマから解放されることよりも、赤ん坊への授乳を怠った自らの罪を認識し後悔することが必要だと見なしており、したがってヘティの従姉の Dinah にはヘティのトラウマを自ら取り除いてやることが出来ない。“Let us pray, poor sinner” (408; bk. 5, ch. 45) とヘティを諭し、ヘティの罪の自覚を求めて一緒に神に祈るだけである。

ヘティの心理を描く際、まず作者は自由間接話法を使ってヘティと距離を置く。途中で同情的な自由間接話法が見られるが、遂には彼女の心理描写そのものがなされなくなる。ヘティは伯父の農場の人間を愛することが出来ず、生き物にも無関心で、彼女の関心事は専ら自分の美貌である。アーサーに誘惑されたヘティは、働かなくてよい生活を “Captain Donnithorne couldn’t like her to go on doing work…” (137; bk. 1, ch. 15) と空想する。この後にはこの結婚が可能であるという彼女の思いや結婚後の贅沢な生活が、皮肉を込めた自由間接話法で延々と続く。妊娠したヘティはアーサーを頼るため伯父の農場を出るが、彼に会うことは出来なかった。宿のベッドに金目の物を並べた彼女のホームシックと心細さが、作者の同情をもって “How she yearned to be back in her safe home again, cherished and cared for as she had always been!” (340; bk. 5, ch. 37) と自由間接話法で示される。しかし、“she could never endure that shame before her uncle and aunt” (340; bk. 5, ch. 37) と思って自殺を決意したヘティの顔は、愛情が消えメデューサに似ている (345; bk. 5, ch. 37)。そして胎児に構わず池に飛びもうとする時点からヘティの内心を表す自由間接話法が消えてゆく。ヘティの苦境に対するアーサーの道義的責任は明らかであるが、池の端でヘティの心に浮かんできたアーサーへの呪詛の言葉を自由間接話法で生々しく描いて作者がヘティへの読者の同情を引くことはない。narrative report と間接話法で、しかも “without knowing what her cursing would do” (346; bk. 5, ch. 37) という作者の道徳的判断を交えて読者に伝える。その後の旅でも作者は narrative report を使いヘティをモラル

の低い人間として差別化している。次に登場する法廷では、ヘティは自分が赤ん坊を生んだことを否定し沈黙を続ける。ヘティが法廷で公権力に恐れをなして沈黙を続けることはこれまでも指摘されているが、ヘティの内面を詳細に示す記述がまったくないことは見逃されてきた。ヘティが強く感じているに違いない処罰への恐怖、自分が社会の恥であること、法廷にいないアーサーに対する不公平感、赤ん坊の泣き声と空っぽになった穴の光景のトラウマは、自由間接話法で描けば皮肉とは解されず必ず読者の同情を引く。そこで作者は彼女の心理描写そのものを省いている。

<グウェンドレンの場合>

グウェンドレンが夫の Grandcourt に強いられてヨットに乗ったとき、突然風が吹いて彼は海に落ちる。彼が「ロープ！」と叫んでも彼女はロープを握ったままじっとして、グランドコートは溺死する。グウェンドレンは、夫の死に顔のフラッシュバック、不眠、記憶障害、離人感など現代の PTSD の教科書にある通りの症状を示す (592, 659, 661, 689)。グウェンドレンのトラウマの根底にあるのは、“I am wicked.” (596-97; bk. 7, ch. 55) という罪の意識である。

ヘティは授乳を怠った罪を自覚しないためそのトラウマは放置された。そこでグウェンドレンのトラウマを論じる前に、彼女のグランドコートの溺死に関する責任を検討する必要がある。グウェンドレンのデロンダに対する告白の核心部分を引用する。“Die!” and he sank; and I felt ‘It is done! am wicked, I am lost!’ and I had the rope in my hand... I was leaping away from myself I would have saved him then...” (596-97; bk. 7, ch. 55) このグウェンドレンの不作為を有罪と見る説もある。しかし発表者はグウェンドレンには少なくとも刑法上の責任はないと考える。グウェンドレンの有罪の判定にとって重要な問題に解答がない (Beer 218)、グウェンドレンはグランドコートが泳げると思っていた (596; bk. 7, ch. 55)、グランドコートに対する彼女の恐怖は“a superstitious point” (366; bk. 5, ch. 36) に達しており金縛り状態が想像されることなどの理由による。

先行研究の多くはデロンダにセラピストの役割を見出している。発表者も Margot Waddell に倣ってデロンダがグウェンドレンの良心の役割を果たしていると考え。確かにグウェンドレンが事件後デロンダと会うことは少ないが、彼女はその後まもなく行われたデロンダと Mirah の結婚式の朝、人々に生まれてよかったと思わせる人間になることを約束する手紙をデロンダに届ける (694; bk. 8, ch. 70)。このことはグウェンドレンが自立して社会との再接続を果たすことを予期させる。さらにグウェンドレンがデロンダを信じ切っている様子を自由間接話法で詳細に描くことで、作者はグウェンドレンが自分の罪の意識を吐露するほどにデロンダに強い共感を抱いていることを読者に納得させようとしている。例えば自分はグランドコートと別居すべきでないというグウェンドレンの道徳的思考は、“But neither in darkness”で始まり“inspected by Mrs Mompert”で終わる、“The association of Deronda with a dubious position for herself was intolerable.”を含む、主に自由間接話法から成る実感のこもった文で構成され、510 語を使用している (515-16; bk. 6, ch. 48)。また、彼女が夫への殺意を抑えるためにデロンダのモラルに頼る様子は、例えば“The sense that he was there would save her from acting out the evil within.” (583; bk. 7, ch. 54) という自由間接話法の文により生き生きと読者に伝わる。

<おわりに>

利己的なヘティに対する作者の反感は彼女から距離を置いた自由間接話法に現れる。また放浪の旅で難儀するヘティの心理を、最初作者は同情的に自由間接話法で描くが、やがて胎児や嬰兒に対する彼女の冷たい態度が明らかになると自由間接話法を使わなくなり、法廷では彼女の心理描写そのものが消える。なぜなら苦境にある人間の心理を詳細に描くと読者はその人物に同情するからである。ヘティのトラウマは放置される。逆に、グウェンドレンがデロンダに向かって自分のトラウマ体験を存分に語る背景には彼女のデロンダへの信頼があり、作者はこの信頼を自由間接話法を用いて詳細に記すことで、読者にとって十分納得のいく感情として示す。トラウマを語ることと他者への信頼の回復は現代のトラウマ治療法の中核でもある。エリオットはその道徳観に基づいて自由間接話法を使い分けることにより、トラウマから救済すべき人物か否かを区別しているのである。

<引用文献>

Beer, Gillian. *Darwin's Plots*. 3rd ed. Cambridge UP, 2009.

Eliot, George. *Adam Bede*. Edited by Carl A. Martin. Oxford UP, 2008.

—. *Daniel Deronda*. Edited by Graham Handley. Oxford UP, 1998.

Gunn, Daniel P. “Free Indirect Discourse.” *Oxford Encyclopedia of Literary Theory*, edited by John Frow. Oxford UP, 2022.

Leech, Geoffrey, and Mick Short. *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*. 2nd ed., Longman, 2007.

<trauma> *The Oxford English Dictionary Online*. Accessed 29 May, 2026.

Waddell, Margot, “On Ideas of ‘the Good’ and ‘the Ideal’ in George Eliot’s Novels and Post-Kleinian Psychoanalytic Thought,” *American Journal of Psychoanalysis*, vol. 59, 1999, pp. 271-86.

ヴァン・デア・コーク, ベッセル. 『身体はトラウマを記録する』 柴田裕之訳, 紀伊国屋書店, 2016.

ハーマン, ジュディス, L. 『心的外傷と回復』 中井久夫訳, みすず書房, 1996.